薄暗い資料室、
転入生の女の子と2人きりになった俺は、若い欲望を抑えきれなかった――
基本18枚
本編162枚！
転入生が大人しそうだったので飼うことにしました。
制作：aegistone
イラスト：禽竜（きんりゅう）

その日の朝は少し違った。
「突然ですが転入生を紹介します。」
転入生か、こんな時期に珍しいな。
俺は机に突っ伏した頭をあげ、教卓の
ほうを見上げると、そこには黒髪の
少女が立っていた。

校則どおりの髪にシンプルな髪留め。
見るからに大人しそうな女の子だった。
は、はじめまして
吉川　優香といいます
あの、よ、・・・
よろしくお願いします
その子はかなり緊張しながら
自己紹介を済ませたようだった。

『キーンコーンカーンコーン』
4限終了の鐘が鳴り昼放課になると、
クラスの女子たちは転入生の吉川に
群がっていた。
前の学校のこととか、趣味とか、好きな
テレビ番組とか・・・。
くだらない質問に彼女はとても戸惑い
ながらもなんとか答えている様子だった。

放課後にそれは起こった。

「おいお前、ちょっと頼まれてくれないか」

帰り支度を済ませ、帰ろうとする俺に教師が話しかけてきた。

どうやら彼女、吉川を、転入に関する資料がある『資料室』まで案内してほしいとのことだった。

正直なところ面倒ではあったが、帰宅部で暇なことがバレている俺はしぶしぶその依頼を引き受けることになった。

「資料室は別館だから、まあついて来て」
「あ、はい、お願いします」

コツ、コツ、コツ……
別館までの道中、彼女との会話はなく、人気のない廊下に2人の足音だけが響いていた。

しばらくそんな気まずい雰囲気で歩き、やっと別館の資料室に着いた。

「資料室、ここな。」
「あ、ありがとうございます。」

俺たちは薄暗い資料室に入り、奥へと進んだ。

資料室は入学シーズンなどは人の出入りが多くなるが、今はもうあまり使われない時期でメンテナンスが行き届いていないらしく、蛍光灯がつかなくなっていた。

「えっと、確か先生の言っていた棚は・・・お、あった。」
指示された番号の棚へと手を伸ばす。
・・・しまった。手が、届かない・・・。
自分の背が低いというわけではないが、
この学校の資料室は少し狭い。そのぶん棚の高さを
上げて補っているのだ。

しかし、男たるもの、高いところに手が届かないのを
女の子に見られるのは恥ずかしいものだ。
会話のない気まずさも気になっていたので、
俺はなにか、彼女へのごまかしの言葉をさがす。

「届かねーな、ハハハ・・・俺が吉川を肩車すれば
届くかもな」

照れ隠しの冗談のつもりだった。初対面の相手に
するには微妙だったかと彼女のほうを一瞥すると・・・

「わかりました。」

え・・・？まじでか・・・？

彼女が俺の方へと近づいて来る。まさか、本気にした？
様子を見るに、ノリツッコミなんてこともないだろう。

ふと俺は思う。この子は人見知りっぽいし、
見るからに大人しそうな子だ。
きっと、言わたことを断れないタイプなんだろう。

冗談だよ、と言いかけたときに、ふと、彼女の
ふとももが目に映る。年頃の女の子の肉付きのいい
足・・・肩車なんてすれば、あれが俺の顔に・・・。

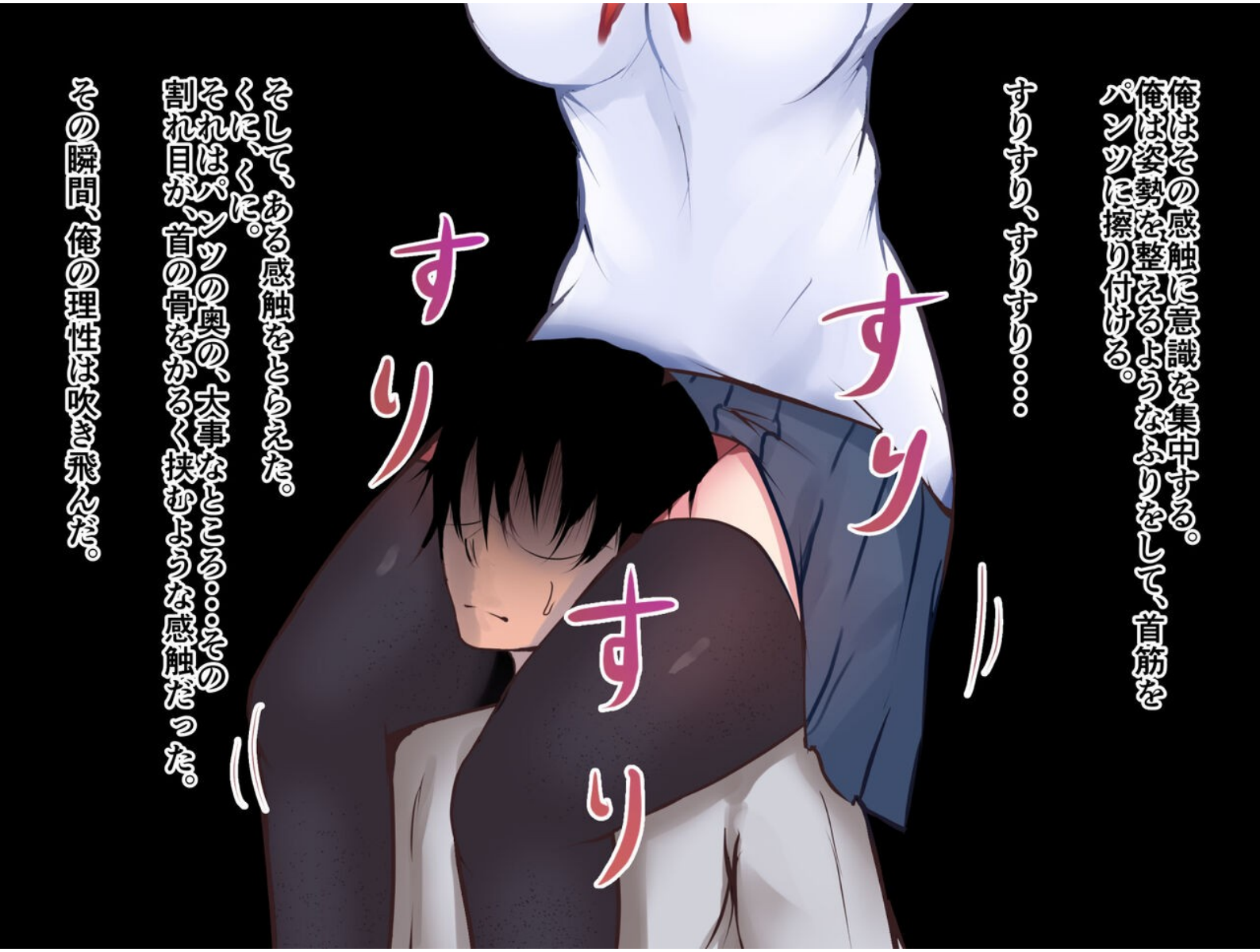
俺はそんな欲望に負け、しゃがみこんで彼女に
肩を差し出した。

彼女が俺の頭をまたいで肩に乗った。
その瞬間俺は息を飲んだ。
やわらかい2つの肉の感触が俺を挟みこむ。
すべすべもっちりとした肌に、蒸れたソックスの熱・・・
やはり彼女は俺に対して緊張しているらしく、その肌はしっとり汗で湿っており、俺の肌に吸い付いてくる。

はあ、たまらん…しかし、ずっとこの感触を楽しんでるわけにはいかない。俺はぐいっと頭を上げ、立ち上がる。
勢い良く立ち上がってしまったせいか、彼女の足が俺の肩をずり下がった。その瞬間…
『ふにっ』
首筋に、柔らかい感触を感じた。
スカートの中のやわらかい布の感触…
パンツだ。パンツが、首筋に当たってるんだ。

俺はその感触に意識を集中する。
俺は姿勢を整えるようなふりをして、首筋をパンツに擦り付ける。

すりすり、すりすり・・・




そして、ある感触をとらえた。
くに、くに。
それはパンツの奥の、大事なところ・・・その割れ目が、首の骨をかるく挟むような感触だった。

その瞬間、俺の理性は吹き飛んだ。

俺は彼女にばれるのも気にせず首筋をその感触に擦り付けまくる。

くにくにくに。

初対面の同級生のパンツ…

しばらくその感触を楽しんでいると、変化が現れた…パンツが、湿り気を帯び始めたのだ。

さすがに彼女も俺がこの感触を楽しんでいることに気付いてるだろう。

この湿り気が汗なのか、それとも…

俺の興奮は高まり続けた。

それからしばらくその濡れたパンツの感触を楽しんでいたが、彼女の一言で我に返った。

大人しい彼女のふりしぼったようなかすれたその一言は、彼女から俺への抵抗だったのだろう。

俺は無言のまま彼女を床へ下ろした。

彼女を下ろすためにその足を支える。
ふにふに。しっとり吸い付くような感触…
先ほどまで自分を挟んでいた気持ちいい感触が、
手だとよりハッキリわかる。
あの…
ふに
ふに
彼女は少し抵抗するような素振りを見せるが、俺の頭はもう彼女をもっと感じたいということでいっぱいになっていた。

俺はいきり勃った肉棒を
彼女の尻の谷間に擦り付けながら、
脅しの言葉をかけた。
乱暴にされたくなかったら
大人しくしろよ・・・。
・・・・！
ビク
ビクン
ビクン
それを聞き、震えだし、怯える様子の彼女に
これ以上の抵抗はされないことを確信した。
ズボンのチャックを下ろし、性器を取り出す。

腰を突き出し、肉棒を太ももの間に
挿入すると、パンツから染みた
ヌルヌルと太ももの汗で滑って、
肉棒全体を刺激される。
あっ…
ニュコ
ニュコ
腰を前後するたびに
パンツの少しザラついた感触と
肌の感触を感じ・・それだけで射精できそうだ。

もっと直接感じたい・・・。
完全に暴走した俺は彼女のパンツをずり下ろす。
俺に怯えきった彼女はされるがままだ。
これが本物のマ●コ・・・しかも初対面の、同級生の・・・。
処理されていない生えかけの陰毛と
ぴっちりと閉じた肉穴は、
彼女の経験の無さを表していた。
この穴で気持ちよくなりたい・・・
もっともっと・・・

我慢できなくなった俺はまた
そこに腰を突き出した。重厚な肉の感触を
直接亀頭に感じる。
やだ・・・
これ、おちん●ん
あたっちゃってる・・・
腰を突き出すたびにかるくワレメが
おし拡がり、膣の肉ヒダが亀頭にからみつき
にゅちにゅちといやらしい音をたてる。
ニュッ
ニュッ
ニュッ

奥まで押し込めば勃起したクリトリスがコリコリとチ●コの先端を刺激する。ショリショリとした生えかけの陰毛からの刺激も心地がいい。
引き抜こうとすればクリトリスがカリ首にひっかかることでまた違う刺激を感じ、射精感がぐんぐんと高まる。
そして彼女の吐息が荒くなったことに気づき、興奮はさらに別次元へと跳ね上がった。
ハア…
ハア…
…っ！
ニュッ
ニュッ
ニュッ

俺は床に手をつかせて
腰をその顔に突き出した。

指示を聞いた彼女は困惑したが、
俺への畏怖が勝ったようだ。
指示通り、彼女は俺の肉棒をくわえる。

彼女は控えめな舌づかいで、
ちゅぱちゅぱと俺の肉棒を刺激する。

柔らかく、暖かい感覚が亀頭に広がる。
ぎこちなさは目立つが、唾液がじわじわと
溢れローションがわりになり、肉棒へと
まとわりついた。

その背徳感に、俺の腰も勝手にぐいぐいと動き出す。

だが経験が無いのであろう、彼女の上手とは言えないフェラチオは、俺の理性を奪った。

俺は彼女を軽く突き飛ばし
腰を突き出させる。
彼女はまた少し抵抗する素振りをみせたが、
もう遅い。
待って！
い、嫌っ・・・！
ぐいっ
つぷ
セックス、初対面の女の子と・・・
俺は肉穴の入り口を亀頭の先端で探り、
いっきに奥へと突き出す。

ぴっちりと閉じた肉壁を亀頭でおし拡げる。
そのたび、ウネウネと肉ヒダがからみつき、
チ●コを絞りあげる。
い、痛い・・・っ
ぬぷぷ・・・
やはり経験は無かったようで、
太ももに滴る鮮血がより俺の加虐心を
煽った。

っ…！

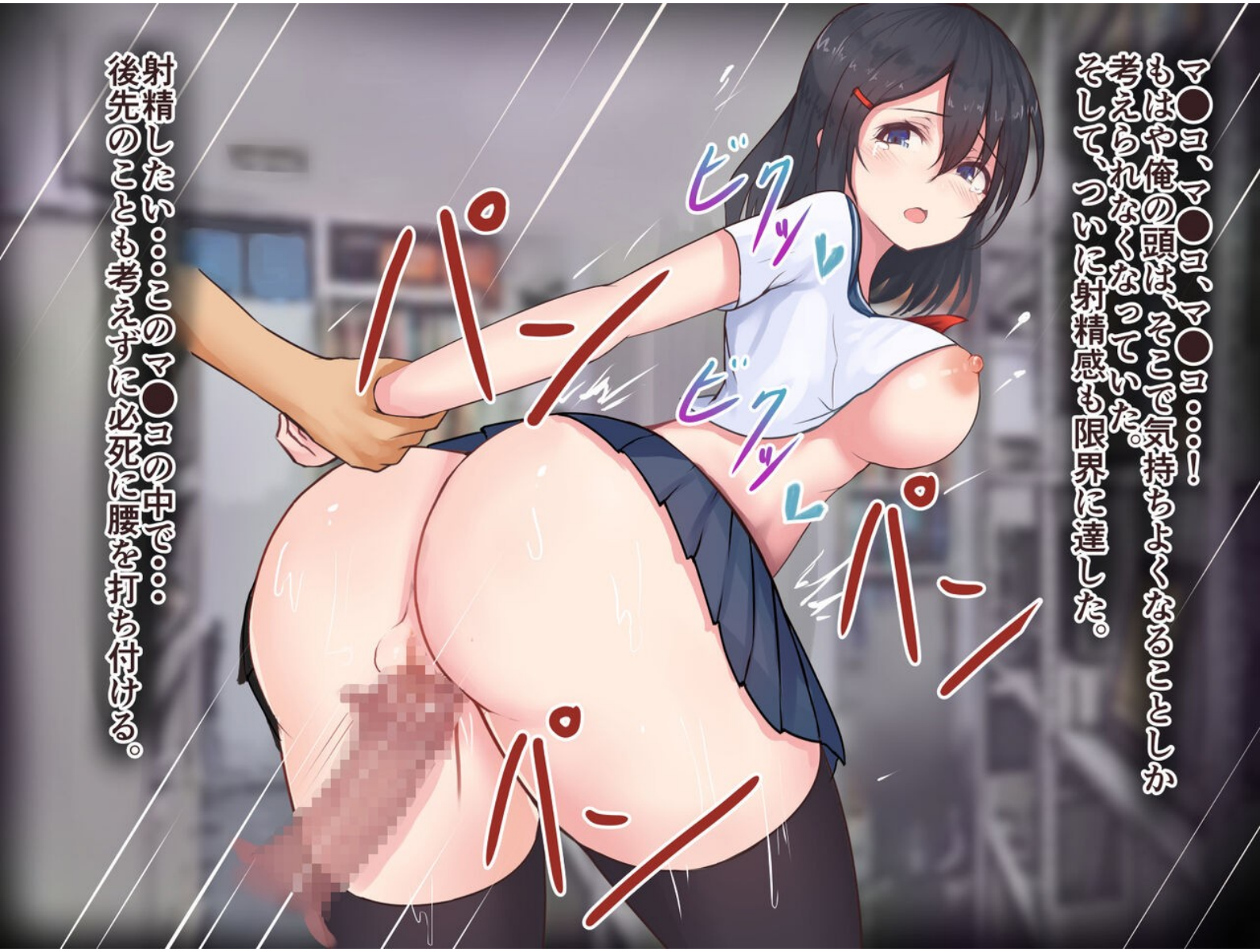
最後まで入ると、チ●コ全体が暖かく気持ちい肉壁に包まれ、さらに絞り上げられる。
俺は子宮口へ亀頭をおしつけるように彼女の腕を引っ張ると、キュンキュンとマ●コが締め付けてきてよりチ●コを刺激される。
ぐりぐりぐり
キュン
キュン

もう許して・・・
ビクッ
はあ・・・
気持ちよすぎるっ
ビクッ
ヌプ
プ

パーン
ビクッ

ビクッ
ビクッ
パーン
パーン
パーン

それからはもう無心に腰を振りまくった。
彼女の肉をえぐるように、チ●コのいいところを擦りあげる。
ビクッ
ビクッ
パーン
パーン
パーン


ビクッ
ビクッ
パン
パン
パン
マ●コ、マ●コ、マ●コ…！
もはや俺の頭は、そこで気持ちよくなることしか
考えられなくなっていた。
そして、ついに射精感も限界に達した。
射精したい…このマ●コの中で…
後先のことも考えずに必死に腰を打ち付ける。

そっ
それだけは・・・！
ああっもうっ
出るっ・・・！
パン
パン

嫌っ
いやあああっ！
パーン
パーン
出るっ!!
パーン

どくっ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビュ

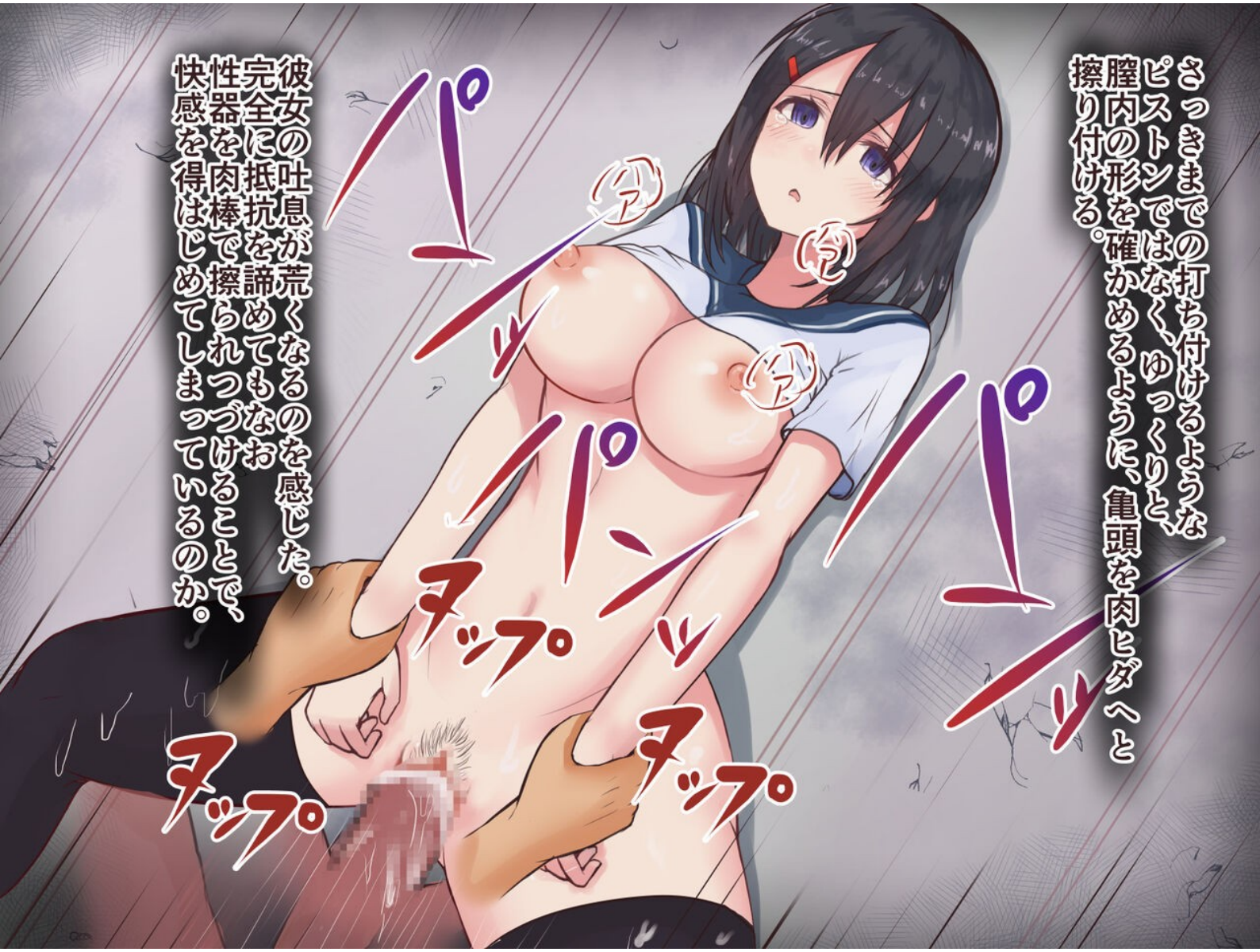
俺は腰をぴったりと押し付け、
たまりにたまった欲望を吐き出す。
びゅくびゅくと種子を膣内へと放出する
最高の感覚。
中で・・・
赤ちゃんできちゃう・・・
どくっ
びゅくっ
びゅくっ
どくっ

だめだ…まだ足りない…。
もっと彼女を汚したい、手放したくない。
俺は彼女のスカートを剥ぎ取り、
床に仰向けになるよう押し倒した。
ぬ
ぷっ

俺は倒れこんだ彼女の両腕をがっしり掴み、まだ萎えないチ●コを押し付ける。
まだ続くの・・・？
もっとこの穴で気持ちよくなりたい、この穴でチ●コをしごきたい・・・。
俺はその一心で、何の抵抗もしなくなった彼女に腰を突き出した。

最初とは違い、愛液と精液が絡みつく膣内は、チ●コをとてもスムーズに受け入れる。
もう・・・はやく終わって・・・
理性のきかなくなった俺は感情のままに、うわ言のように言葉を発するようになっていた。
はぁ・・・この穴っ気持ちよすぎるっ
ヌプヌプ

完全に無抵抗な彼女の体をオナホールのようにして上下にゆさぶる。
俺が本能のままに卑猥な言葉を発すると少しだけ歪む表情がより俺の興奮を誘った。
オナホみたいにチ●コしごくの…たまんねえっ…
パン
パン
ヌプ
ヌプ
ヌプ


さっきまでの打ち付けるようなピストンではなく、ゆっくりと、膣内の形を確かめるように、亀頭を肉ヒダへと擦り付ける。
彼女の吐息が荒くなるのを感じた。
完全に抵抗を諦めてもなお性器を肉棒で擦られつづけることで、快感を得はじめてしまっているのか。
パ
ン
ッ
ヌップ

彼女の吐息にはやがて声が混ざりよりいやらしく俺の射精を誘ってくる。
嫌なのに、どうしても声が出てしまう・・・。そんな様子の彼女をもっと感じさせたくなった俺は激しく腰を打ち付け、また絶頂をむかえた。
あっ
パンッ
パンッ
ヌプッ
ヌプッ
ヌプッ

ビクッ
ヌップ
どくっ
どくっ
うっ・・・
あああっ!!
出る、出るぅ!!

俺は自分の精液で汚れきったチ●コを引き抜き、彼女の口元へと腰を運ぶ。
むぐっ
ペタ
ほら、口で掃除して・・・
柔らかい唇が敏感な亀頭にやさしく吸い付いてくる。
びゅるる
ひく
ひく

閉じた口をこじ開けるようにチ●コをぶちこむ。
唾液と精液がぬるぬると絡みついてくる。
むぐう・・・っ
ずっぷー
ううっ、口小さくて狭いっ・・・！
まだまだ射精したりない俺は彼女の口も利用してチ●コをしごき始めた。

喉までチ●コを押し込むたびに
嗚咽をもらしながら
口全体がチ●コを押し返してくる。
んぐっ
むぐううっ・・・
ずっぷ、ずっぷ、ずっぷ、
ああ～っ
口もよすぎて
また出そうだっ・・・！
俺は入りきらなかった精液が
溢れてヒクヒクと痙攣する
マ●コをオカズにしながら、
口をずっぷずっぷと激しく
犯しまくる。

出るビュッ
ぴゃっ!!

ふと冷静に戻った俺はポケットからスマホを取り出し、精液まみれの姿を写真に納めた。
パシャ

「誰かに言えば写真をばら撒く」
俺はありがちなセリフを吐いて、
その場から急いで立ち去った。
彼女は黙って
コクリと弱々しく頷いた。

後日、彼女の肌の感触を忘れられないで
悶々としていた俺は、例の写真を使って
彼女を深夜の公園の公衆便所に呼び出した。
ここなら誰にも邪魔されることはないだろう。

トイレの個室に連れ込み、早速服をはだけさせた。
俺に怯えて従順な彼女を乱暴に便器に座らせ、足をおおきく開かせる。

資料室ではっきりと見ることはできなかった使い込まれていない綺麗な性器と乳首、そして羞恥にゆがむ彼女の表情が俺の興奮を誘った。

2本の指を割れ目にあてがい、
マ●コの肉を遠慮なしにまじまじと観察する。
見られる緊張からか、入り口のヒダが
ヒクヒクと痙攣していやらしい。
くぱぁ
大事なところ
じっくり
見られちゃってる・・・

俺は用意してきた玩具を取り出し、
開いた肉に押し込む。
見たことのないソレに
訝しげな表情の彼女を横目に、
スイッチを起動する。
ぴとっ

今まで感じたことのない
振動の刺激に体をよじらせる彼女に、
顔を近づけると、露わになった
おっぱいをまじまじと眺める。
この歳にしてはかなり発育がよく、
ぷっくりと半勃起した乳首が可愛らしい。
乳首、勃ってきてるぞ
見られて
感じてるのか？
ち、
ちがいま・・・
ヴヴヴヴヴ

彼女の言葉を遮るように、膨らんだ乳首を咥える。
初めて味わう、これが女の子のおっぱいの味…。
ビクッ
ちゅう
ちゅう
ちゅう…？
ヴ
ヴ
ヴ！

俺はさらに強く、激しく乳首に吸い付く。
乳首をコロコロと舌で転がすと、じわじわと口のなかで勃起し、かたくなっていくのを感じた。
ちゅるっ
ちゅるっ!!
おっぱい、赤ちゃんみたいに吸われちゃってる・・・

じゅるじゅるとその味を楽しみ、
興奮しきった俺は唾液まみれのおっぱいを
手で押し寄せて、チ●コを押し付ける。
もっちりとした柔らかさと
しっとり湿った汗が亀頭に心地よく吸い付く。
ぐにゅ
すりすり

両手でおっぱいを押し付けながら、
その隙間に肉棒を挿入する。
弾力のある肉感が押し返してくるのを
押しのけて奥へと突き出す。
はあはあ・・・
パイズリっ
やってみたかったんだよ
しゅこしゅこ

ぎゅっとおっぱいをチ●コに押し付けながら
腰をふると、おっぱいにチ●コ全体を包まれて、
とても気持ちがいい。
胸板に亀頭を擦り付けるようにすると、
肋骨に裏スジが強く刺激され、
射精感がつのる。
ニュッ
ニュッ
ニュッ
ニュッ

びゅっ！！
止ろっ！！

彼女の顔めがけてザーメンを吐き出す。
どろどろと臭いそれは彼女の顔と
着て来させた制服をべっちょりと汚す。
俺は肉棒を引き抜き、
再びさっき押し込んだローターへと目を向ける。

割れ目に挟み込まれたローターを
引き抜くと、そこは愛液で溢れ、
ねっとりと白い糸をひいていた。
マ●コ、ぐっちょり
濡れて糸引いて…
準備万端だな
ねちょ〜っ
んっ♥
引き抜かれる刺激で
彼女は体をよじらせて
男を誘うような甘い嗚咽をもらす。

完全にチ●コを受け入れる準備ができたグチョグチョの肉穴に亀頭をかるく押し込むと、さっきのザーメンと愛液が絡み合ってくちゅくちゅと音を立てる。
おっぱいもアソコもジンジンして・・・今、おちん●ん入れられたら・・・
(んっ
くちゃっ

とろけきった肉壁はチ●コを子宮口まで簡単に受け入れた。
おっぱいも口もいいけど、やっぱりマ●コが最高だな・・・っ！
あぁっ♥
じゅっぽ
悶える彼女の表情とは裏腹に、ザーメンを受精したがるかのように、ヒクヒクと肉ヒダが痙攣し、からみつき、チ●コからザーメンを搾り取ろうとしてくる。

腰を打ち付けるたびに
大きな水音がぱちゅん、ぱちゅんと
たち、愛液がチ●コの周りで泡立つ。
彼女はたまらず、抑えきれなくなった
喘ぎ声を吐きはじめた。
調子に乗り切った俺はさらに彼女への
強要を増やす……
あっ
んっ
んっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ

はあはあっ
ザーメン、子宮に
種付けしてくださいって
おねだりしろっ！
あっそんな・・・んっ
こと、無理・・・あんっ
れすっ・・・・！
(あっ)
(んっ)
(んっ)
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ

口答えするなっ！
あの写真、
ばら撒かれてもいいのか？
そ、それだけはっ・・・
んっあぁっ・・・
あっ
んっ
んっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ

彼女を個室から出し、
公衆便所から引っ張り出そうとすると、
当然ほぼ丸裸の彼女は抵抗する。しかし、
「言うことが聞けないのか？」
と俺が凄むと、彼女はうつむき、
俺に従った。

公衆便所の茂みに
彼女を押し倒し、腰をこちらに
突き出させる。
溢れる愛液がてらてらと
街灯で照らされる。
こんなところで・・・
誰かに見られちゃう・・・
とろ～ｯ

肛門を指で弄りながら、
汗だくの尻を揉みしだく。
こうやって犬みたいに
伏せてれば見えないって
ぐにっ
ぐにっ

そうだな・・・
今日からお前は性処理ペットだ
毎日、俺の相手をしてもらうからな
そ、そんな・・・
ぬっ
グッ
グッ

あっ
従順になるまで
犯して躾けてやるっ！
ニュププ…

ビクッ
(あ)
おっ!?
すぅ…っ!

ビクッ
ビクン
パン
パン
パン

喘ぎ声、出ちゃってるぞ？
ケツ穴ほじられながらここ突かれるのが好きなんだなっ！
あ
あん
あ
ビクン
パン
パン
パン

おらっ、イけっ!!
ビクッ
(あ)
(ん)
ビクン
な、何か…きちゃうっ…!
パン
パン
パン

ビクッ
ん
ん
ビクッ
ビクッ

絶頂をむかえ更にキツく締め付けてくる膣内から引き抜くと、精液と愛液の混ざり合った液が糸を引く。
はあっ
はあ
ドロッ
ヒクヒク
ヒクッ
交尾を終えた俺の頭は、明日からこのメスをどう支配するかということばかりになっていた。

翌日。
俺は思い切って彼女を
校舎裏に呼び出した。
言われた通り、放課後の人気のない
校舎裏に時間通りやってきた。
あの写真の効果は彼女には
絶大らしい。
また学校でなんて・・・
するならはやく
終わらせてください・・・
わかってるよ
スッ
諦めたような態度の彼女は
手早く行為をすませようとしたのか、
自分から服を脱ぎはじめた。

彼女は俺の指示に従い、ぷっくりした2つの肉を指でおさえ、広げる。

本来もっとも女の子が隠さなければならないところを目の前で露出させる姿に、股間がじわじわと熱くなった。

ん・・・？
なんだもう濡れてるのか
そ、それは・・・
クチュッ
露出された恥部に2本の指を
軽く挿入してみると、意外にも
すでにそこはすこし湿り気を帯びていた。
ぬるぬるとしたそれを使い、
ゆっくりと指を奥へと送り込む。

俺の不躾な質問にも素直に答える。
彼女の感じやすい性感帯は
オナニーで開発されたもののようだ。

それでこんなに濡れやすい変態マ●コになったんだな
そ、そんなこと・・・んんっ・・・！
ジュプッ
ジュプッ
ジュプッ

普段はどうやっていじってるんだ？
うぅ……ここの…上のところを机の角にひっかけて…擦り付けてます…っ
ジュプッ
ジュプッ
ジュプッ

『ここ』じゃわかんねーよ！
ちゃんと言わなきゃ
痛くするって言ってるだろ！
痛っ・・・ごめんなさいっ！
おま●こですっ！
おま●このクリトリスいじって
オナニーしてるんですっ！
ずんっ

手淫でほぐれきったそこに
亀頭を押し付けると、腰を引き付けるように
膣肉が強く吸い付いてくる。
そろそろ入れるぞ
ほら足絡ませて
はい・・・
ヌリュ

もっと足くっつけて
そうそう・・・
あっ
んっ
ぐしっ
ニュ
ニュッ
放課後の校舎裏、
こんな状況だから、なのだろうか？
彼女はすぐに艶のある声を
漏らし始める。

すぐに感じるようになったな
もしかしてこういうとこでするほうが
好きなのか？
そ、そんなわけ・・・
ない・・・んっ・・・
ハァ
ハァ
ヌチャッ
ヌチャッ
ヌチャッ

これ、吸い付きヤバ過ぎて…
すぐにでも出そうだっ…
ハァ
ハァ
出すなら…出せば
いいじゃないですか…
ぐりゅ
ぐりゅ
ぐりゅ

なんだよその態度は？
なんなら誰か生徒が来るまでしてもいいんだぞ？
お、怒らせるつもりじゃ…
ごめんなさい…！
ハァッ
ハァッ
ぐりっ
ぐりっ
ぐりっ
俺が彼女が凄むと、
肉穴女は震え、
快楽穴がは収縮し、
を感じさせる。
そのたびに
病みつきになるほどの

あっ
あ、
あんっ
許して欲しかったら
おマ●コに種付してくださいって
おねだりしてみろよ
うぅ…
お、おま…んこに…
た、たね…
ああ!?
聞こえねえよ!
ぐりゅっ
ぐりゅっ
ぐりゅっ

お、おま●こにっ
種付けしてくださいっ!!
よーし
オラっ!
ご褒美だっ!
んんっ・・・!
あ、
んっ
パンッ
パンッ
パンッ
パチュッ
パチュッ
パチュッ

ビクッ
おおぅっ！
出るっ！
ああああっ！
ビクッ
ビュクビュルルッ
ビュクッ

じゃ、
ここで四つん這いに
なって
・・・
こう、ですか・・・？

あれからずっと、
彼女を呼び出しては溜まった
性欲処理をさせる関係が続いていた。
写真で脅され、だんだん従順になる
彼女への行為は、校内にまで
及ぶようになった。
今日も体育の後の放課、
クラスの女子の体操服姿に
ムラムラと溜まった性欲を
吐き出すため、体倉庫の物陰に呼び出した。

運動後のむれた肌からは
だらだらと汗がたれ、
甘美なにおいを放っている。
体操着をまくり、スポーツブラを外させると、
ぐっしょり濡れた汗が体操着に
染みて、うっすらと
2つのピンク色が浮かび上がる。

俺はブルマの端をつかみ、
重いっきり引き上げる。
面積の少なくなった布から
肉がハミ出て、その奥のラインが
よりハッキリわかる。
ぐい

クチュ
あんっ・・・
ズブッ
チュッ
食い込んだブルマをずらすと、
体液でぬっちょりした
秘部が露わになる。
俺も腰を降ろし、
ガチガチになった肉棒を
とりだしてそこに押し付ける。

もう濡れてきてるな・・・
そ、それは・・・
ニュルッ
ニュルッ
ニュッ
ニュッ
ニュッ
熟れた割れ目にそって肉棒をなぞるように押し付ける。
するとすぐに、ニュルニュルとしたものが亀頭にからみつく。
既に濡れていたそこは、肉棒を受け入れる準備ができていた。

この淫乱がっ！
ちがぃっ…
んんっ……♥
ずんっ
キュッ
じゅぷっ

ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
グチュッ
グチュッ
ぬっちょぬちょと
滑る肉はズッポリと
肉棒を最後まで咥え込む。
運動後の汗が大量に
混ざった愛液が、いつもより
ぬるぬるとローションのように
肉棒への摩擦を減らし、
膣内のヒダやイボの感触を
ハッキリと感じさせる。

ぱんっ
ぱんっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
グチュ
グチュッ
んっ(ア)(ア)ぁっ
マ●コ…いつもよりグチョグチョにい付いてヤバいっ…!
あの…っそろそろ次のっんっ授業がっ…

ペットがご主人様に急げってのか！だったらお前が腰振って搾り取れよ！
あっんっ…わ、私が…？
ぱんっ
ぱんっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
グチュ
グチュッ
(ア)
(イ)

俺はマットに寝そべり、
彼女に俺をまたがせ、自ら挿入させる。
腰を動かし始める彼女。俺は自由になった
腕で、体操服をまくりあげた。
い、言わないで・・・
おっぱいもマ●コも
丸見えだぞ？
ヌプッ

彼女の膣内は淫語を使うたび、
羞恥からか、キュンキュンと
肉棒を締め付けてくる。
さらに、体重が乗った激しいピストンが
ずりずりと肉棒を絞り上げる。
じゃぶ(ヤ)
この格好、
奥まで届いちゃうっ…
汗だくマ●コ、
そんな激しく腰ふられたらっ
ああっ…
じゅぶ
じゅぶ

次の授業に間に合わせるため
彼女の腰振りはさらに加速して、
俺は限界を迎えそうになる。
俺の最後の要求に、
焦る彼女はしぶしぶ応えた。
じゃぶ(ヤ)
イってほしいなら
おねだりしろよ！
うう・・・はやく
射精してください・・・！
じゅぶ、じゅぶ、

彼女にさらにいやらしく
射精のおねだりするように
命令する。
彼女は必死に羞恥心を
押し殺しながら言葉を探す。
もっといやらしい言葉で
行ってくれないと
イけないなあ・・・！
・・・・・もっと・・・？
・・・・わ、わたしの・・・・・
じゅぷ(ヤ)
じゅぷ(ヤ)
じゅぷ
じゅぷ

私のおマ●コで・・・
ど、ドピュドピュってっ
射精してくださいぃっ・・・！
絞り出された彼女の声を聞き、
俺は腰を浮かして
腰を下から打ち付けた。
ぱんっ
(あんっ)
(んっ)
(あっ)
ばんっ
ばんっ
パチュ
パチュ
あぁっ・・・
もう出るぅっ!!

オラッ
ご妻美の
種付けだッ!!
んんっ
あぁっ♥
ドプッ
ドピュッ!!!

吐き出した精液はダラダラとマットに滴る。
結局その掃除のために次の授業はサボることになった。
キーン
(ヶ)
(ハ)
(ハ)
コーン
カーン
ブピッ
ビビビ
ろっ

今日は水泳の授業だ。
この機会を逃すまいと、俺はあらかじめ
彼女に授業を抜け出すよう伝えておいた。
誰もいない更衣室で待つと、
遅れて彼女は現れた。

彼女の腕には、可愛らしい黒の下着が抱えられていた。
もちろん、彼女の付けていたものではない。
あの、下着持ってきました・・・
俺がクラスの委員長の下着を女子更衣室から拝借してくるように言っておいたのだ。
俺はその下着をさっそく「使う」ことにした。

肉棒が盗んだパンツに包まれる。
さっきまで女の子の肌を守っていたパンツがいまは男の一番汚ところを包み込んでいる。
俺は目の前の水着片側だけずらした。
パンツで包めばいいんですか…？
ああ、それで扱いてくれ
ニギッ

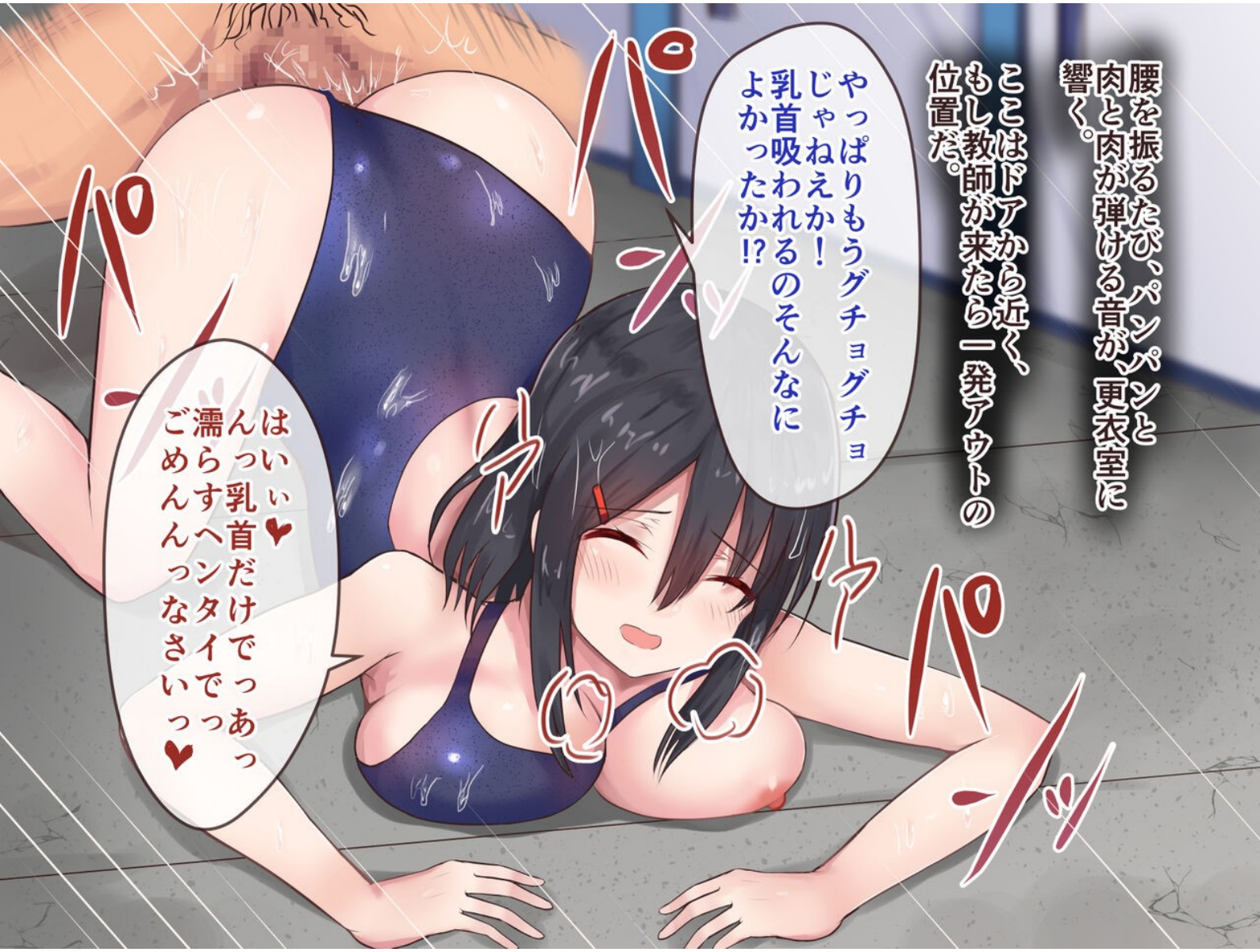
彼女はパンツを絡ませながら
優しく肉棒を扱き始める。
さっきの放課まで普通に話していた
委員長のパンツが今、俺の肉棒を
刺激するための道具と化しているのだ。
委員長パンツコキ
よすぎるっ！
シュッ
シュッ

俺は本能にまかせて乳首にしゃぶりつく。
チ●コを扱かれながら女の子の乳首に吸い付くという最高のシチュエーションに胸が高鳴る。
じゅるっ
チュパッ
シュッ
シュッ

しばらく扱かれると、すぐに射精感が高まった。
このシチュエーションのおかげもあるが、彼女が俺の気持ちいいところを覚え始めているらしい。
じゅるっ
チュパッ
シュッ
シュッ

もうすぐ授業も終わる。
俺は彼女を押し倒し、限界まで
膨れ上がった肉棒を押し付ける。
やっぱり射精すならこっちだなっ！
あんっまたアソコに・・・
ヌチッ

最初から激しく、
打ち付けるように腰を打ち付ける。
すでに俺のチ●コの形を覚えた
肉穴はみっちりと締め付けてくる。
アソコじゃなくて
ま●こだろ！
エロ言葉でよがれって
教えたろ！
パン
パン
パン
パン
パン
あ～っ
ごめんなさい♥
おま●こ気持ちいい
です・・・♥


腰を振るたび、パンパンと肉と肉が弾ける音が、更衣室に響く。
ここはドアから近く、もし教師が来たら一発アウトの位置だ。
やっぱりもうグチョグチョじゃねえか！乳首吸われるのそんなによかったか!?
パン
パン
パン
パン
はいぃ♥んっ乳首だけでっあっ濡らすヘンタイでっごめんんっなさいっ♥

だが、あえて隠れず
堂々と通路の真ん中で交わる。
誰かに見られてしまうかも
しれないという状況。
そのほうが彼女の膣圧は
キュンキュンと強まるのだ。
パン
パン
パン
パン
そうだな
こんな場所で発情する
変態肉便器だっ！

俺はラストスパートをかけるようにさらに力強く腰を振る。
彼女はそれに合わせて腰を動かし、自分の気持ちいいところを探りつつも俺のチ●コを射精へ導く。
やっぱりこのマ●コ・・・最高だっ！
パン
パン
パン
はいぃ♥ありがとうございます♥

だんだん彼女の腰振りが激しくなる。
もはや喘ぎ声を隠す様子すらない。
最近の彼女が性処理のときだけ
やや積極的になり始めていると思うのは
俺の気のせいだろうか。
ああああっ
もうイきそっ・・・
わ、私もっ・・・
パン
パン
パン
パン

ガッチリと腰を抑え、
子宮へと届くよう亀頭を
奥へ奥へと押し込む。
俺は彼女をイかせるよう
いつも彼女が激しく吐息をもらす奥を
突き上げる。
あっ
はあっ
あっ
あんっ
パンッ
パンッ
パンッ
ほら出るぞ
受け止めろっ！

確実に子宮に届くほど一番奥で、
精液をどぷどぷと吐き出す。
同時に達した彼女の膣は、
かなりのキツさでキュウキュウと痙攣を
起こし、根元から精液を搾り取った。
あ〜あ〜あ〜
ほら出るぞ
受け止めろっ！
ビュッ

いつもより積極的に腰を振る彼女のおかげで強い充足感を感じるセックスだった。
今日の性処理はすごいよかっただったぞ・・・
ありがとうございます・・・♥
事後、帰り際の彼女は、なぜかいつもの暗い表情を見せなかった。
ハアッ
ハアッ
ハアッ
ポタ
ポタ

とある休日。
今日は初めて、俺の部屋に
彼女を呼び出してみることにした。
いつもの怪訝な顔をしながらも、
初めて入るであろう男の部屋を
少し興味ありげに見ている。

いつもなら、呼び出してすぐに
性欲を満たし、全く普通の会話が無いまま
お互い黙って別れる・・・。
それが俺たちの関係だったはずが、なぜだか
今日は普通のことを話しかけてしまった。

いつもなら、呼び出してすぐに性欲を満たし、全く普通の会話が無いままお互い黙って別れる・・・。

それが俺たちの関係だったはずが、なぜだか今日は普通のことを話しかけてしまった。

彼女も、普通に言葉を返した。
いつもの敬語はなく、きっと彼女の本当の顔で。
なんだか恥ずかしくなった俺は
少し黙ってしまったが、次に声を出したのは
彼女だった。

それから小一時間、彼女と普通の
会話が続いた。学校のはなしとか、
家庭のこととか、なんでもない内容だった。
自分の部屋に女の子を誘って普通に
談笑して…これってまるで…

何を考えてるんだ俺は。

平静を装うように、俺はいつもの強気な態度で彼女に言葉を切り出した。

そう、俺はこいつの飼い主…

俺がスイッチを入れると、彼女も察して表情を変える。

俺はベッドに彼女を押し倒し、
腕をタオルでベッドの金具に縛りつけた。
ギュ
ギュ
よーし、
ちゃんと下着を
つけずに来たんだな
はい・・・
大きく股を開かせると、
命令しておいた通り、下着を
つけず、隠さなければならないところが
無防備になっていた。
ガバッ

彼女は毎日のように続く俺の要求にも慣れて来たのだろうか、俺の卑猥な言葉に対し、
ノーパンで道歩くの、興奮したか？
は・・・はい・・・ご主人様のためにお、おマ●コ濡らしておきました・・・
たどたどしいながらもいやらしい言葉を選んで答えるようになっていた。従順だ。俺に犯され続け、彼女は精神的に俺に絶対服従になっていた。

俺は部屋に持って来ておいた
髭剃りとクリームを手元に置き、
それを彼女の秘部の周りに塗りたくる。
ご褒美に
トリミングしてやるよ
え・・・？
ペチョン
彼女は何がはじまるのかという
不安の声を漏らす。

髭剃りで彼女の肌を傷つけないよう
陰毛を剃り上げる。
俺が剃毛のためにマ●コを
まじまじと見つめるからか、じわじわと
また愛液が垂れてくる。
ようやく何をされているか
理解した様子の彼女は、
悶えるような表情でさらに顔を赤くさせた。
ラブ…
ジョリ
ジョリ
ジョリ

綺麗に剝り上げたそこはぷにぷにの肉感がよりハッキリと伝わり、
ほら、綺麗になったぞ？
あ、ありがとうございます・・・♥
ヒクヒクと蠢く肉ヒダが俺の興奮を誘う。
俺は乱暴に彼女の服に手をかけた。

服の紐を緩めて剥ぎ取る。
ほぼ生まれたままの姿になった彼女に
欲望をぶつけるべく、俺も
ズボンのチャックをおろし、肉棒を
綺麗になった割れ目にふにふにと押し付ける。
もうグチョグチョだな
どうして欲しいんだ？
お、おチ●ポで・・・
おマ●コゴ、シゴシして
気持ちよくなってくださいっ
彼女とは何度も体を重ねているが、
こうやって体の動きを奪って
女の子を犯すというのは、いつもより
俺の劣情を刺激した。

くぅっ！
いい具合になってるな！
あぁあ～♥
ズプッ
覆いかぶさるようにチ●コを挿入する。
もう彼女は声を抑えることもなく
喘ぎ声をあげる。

意識したことはなかったが、体の相性がいいのだろうか、いつものように彼女の肉壺は、俺のを奥まで咥えこみ、ニュルニュルと全体を
程よい強さで締め付けてくる。俺はその感触を確かめるように、徐々に腰振りを速くさせる。
パチュ
パチュ
パチュッ
パチュッ
あんっ
あっ
んっ

はぁはぁっ！
やっぱり気持ちよすぎるっ
お前は最高の性処理ペットだ！
はいぃっ！
ありがとう・・・
ございますっ！
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
じゃぶっ
じゃぶっ

ビクッ
ビクッ
んあぁ
あぁ
出る
出る
ビクッ!!

スカートも脱ぎ去り、彼女はさらに無防備な状態を晒す。
俺は真剣な眼差しで彼女を見つめ、彼女の顔へと詰め寄った。

また性器を挿入しながら、
俺は無意識のうちに彼女の唇を
奪っていた。
思えば、彼女と唇と唇を重ねるのは
初めてのことだ。
ぬ
ちゃっ
ぬ
ちゃっ
ぬ
ちゃっ
んっ
ちゅっ

小さな口に舌を侵入させ
彼女の舌に巻きつくように
口内を犯す。
この世のものとは思えないほど柔らかい
唇の感触を感じながら腰を揺らすのは
俺の征服欲を最大限に満たしてゆく。
ぬ
ちゃっ
ぬ
ちゃっ
ぬ
ちゃっ
ぬ
ちゃっ
んっ
むっちゅぱっ
ちゅっ

多少の抵抗はされるものかと思ったが、彼女は静かに目を閉じされるがままだ。
俺は唾液を吸い取るように激しくディープキスを続ける。
そのたび、腰の動きも自然と速くなった。
ぬちゃっ
ぬちゃっ
ぬちゃっ
ぬちゃっ
じゃるるるっ!!
じゃるるっ
ハァハァ
あ
あ

舌が性器になったように気持ちいい。
膣と口、ふたつの粘膜をひたすら擦り続ける。
俺は溢れる愛液も唾液も、すべてを感じながら彼女を犯し続けた。
ぬちゃっ
ぬちゃっ
じゃるるっ!!
じゃる。
ぬちゃっ
ぬちゃっ

こうして唇を重ねると、
彼女の全てが愛おしく感じる。
セックスとはこんなに気持ちいいものだったのか。
俺は最高の快楽のなかで絶頂をむかえる。
じゅるるるっ!!
キュン
びゅくくっ!!

ガチャ
こ、ここってお庭・・ですよね？
俺は彼女に目隠しをさせ、庭へと繰り出した。
昔飼っていた犬の首輪を拾い上げ、彼女の首へと通し、その鎖を庭の鉄柵へと繋ぎ止める。
されるがままの彼女も、さすがに戸惑いの声を漏らす。
そうだよこの時間は通行人少ないけど

ああんっ
何か・・・お尻に・・・
俺は買っておいたアダルトグッズをアナルへと挿入する。
フサフサとした飾りのついたソレが奥まで挿入されると、尻尾が生えたようになる。
お利口なペットにご褒美のプレゼントだよ
ズプッ

ちょっと用事思い出した・・・
戻るまでここで待っててくれよ。
2発も連続で射精し、
チ●コは少し萎えてしまっている。
それが回復するまでの間、
いわゆる『放置プレイ』というのを
試してみることにした。
ドアを閉める音を出して、
庭からいなくなったと思わせる。
えっ!?
まっ待って・・・!
ガイイイ・・

だら
だら
だら
こんなところで・・・
外に人、いないよね・・・？
彼女に自分がいることがバレないよう、背後へと回り込む。
彼女が見られるかもしれないという状況に興奮する気があるのは知っていたが、この状況も例外でないようだ。
さっきまでのセックスの間に流したものではない愛液がどくどくと生産されている。

ぬりゅ…
これだけで快感を感じ始めているのだろうか、ぬりゅぬりゅとアナルからおもちゃがひり出され、結合部の球体が露出する。
おしりのモノがこすれてっ…うっ…

ねっちゃっちゃ
だら…
だら
なんでこになに…おしり、気持ちいいの…？
球体がひとつ、またひとつと吐き出されるたび、マ●コもヒクヒクと動き、愛液を吹き出す。そしてついに、限界を迎えたようだ。
ハァ
ハァ

ビクッ
ビクン
ビクン
なにかきちゃうっ！
ううっ……！
勢いよく液体が肉穴の隙間から吹き出した。潮を吹いたのだ。
初めて見る、俺の顔までかかるほどの潮吹きに、俺の興奮は再燃し、股間に血液が集まっていく。
あぁ。

おいおい
尻尾が抜けかけてるぞ？
俺は声をかけ、
抜けかけの尻尾を
さっきよりも深く押し込んだ。
俺の声を聞いた彼女は
安堵の声を漏らし、少し表情が緩んだ。
その声・・・！ずっと
いてくれたんですね！

こんなに濡らして・・・
どうしてほしいか
言えるよな？
ハア・・・
ハア・・・
ガチガチに復活した
チ●コを、ほぐれきった
割れ目に押し付けて
挿入しないようにゆっくりと
擦り付けじらす。
目隠しをはずした彼女も
もう完全にその気の表情だ。
はい・・・アソコが・・・
おま●こがせつなくて・・・
はやくおち●ちんくださいっ
ニュ
ニュ
ニュ

ずっぷ
あぁん♥
おち●ちんきたぁ♥

ほら、これが欲しかったんだろ！
街のみんなに見てもらおうな！
だめぇ！
見られるの・・・らめぇっ！
パッ
パッ
あっ
んっ
あんっ

ら、こうすると
周りからよく見えるぞ？
こ、こんな
格好で・・・・
彼女の太ももをがっしりと掴んで持ち上げると、
無防備に股を開く姿が
庭の向かいの通路から丸見えの
状態になる。

本当は嬉しいんだろ！
ちゃんと言えないと
お仕置きだぞ！
は、はい！
気持ちいい、です！
お外でするエッチ
気持ちいいのぉ！
ジュプッ
ジュプッ
ジュプッ

くう、隠れてするときより
締まりすぎて・・・
もう、イくぞっ！
ジュポッ
ください！
変態おま●こに
種付けご褒美ください♥
ジュポッ

おうっ!!
出るぞっ!!
ドクン
ビュ!
ビュクッ!
ああっ
イクっうう!!

その後も何度も、
お互いの若い肉欲のままに
俺たちは体を重ねた。
この関係がいつまで続くのだろうか。
そんなことはどうでもよかった。
今ある欲望を俺は吐き出し、
彼女はそれを受け入れた。

明日は何をして躾けようか。
ブビビ♥
fin.

やりますから…
もう帰らせてくださ
俺はいきり勃った肉棒を彼女の尻の谷間に擦りつけながら卑しの言葉をかけた。
乱暴にされたくなかったら大人しくしろよ…。
……！
2人だけの密室…
あるキッカケで触れてしまった
女の子の柔肌に発情し…
完全に無抵抗な彼女の体をオナホールのように上下にゆさぶる。
俺が本能のままに下品な言葉を発するとビクッと反応し怯えた表情がより俺の興奮を誘った。
オナホみたいにチ●コしごくの…たまんねえっ…
精根尽き果てても
容赦無くそのまま連続射精!!

自分の指で開いて見せてみろよ
うぅっ…これでいいですか…
彼女は俺の指示に従い、2つの肉な指でおねだりした
くぱっ
ぐにゅ
すすっ
そうだな…今日からお前は性処理ペットだ毎日、俺の相手をしてもらうからな
そ、そんな…
ぬっ
ぐぐっ
そして始まった脅して呼び出して性処理の日々・・・！
変態的な要求にも逆らえない！
許して欲しかったらおマ●コに種付してくださいっておねだりしてみろよ
うぅ…お、おま…んこに…ただね…
ああ!? 聞こえねぇ

あの、下着持ってきました…
要求はエスカレート！
授業を抜け出し…
盗ませたクラスメイトの
下着で…
濡れ透け体操着H！
授乳パンツコキ！？

体を重ねる日々、
次第に男を受け入れはじめる…？
剃毛プレイ！
深夜の庭に
全裸放置！